

2月8日（日）サムエル記第一20章5～9節

「とんでもないことです。父があなたに害を加える決心をしていることが確かに分かったら、あなたに知らせないでおくはずはありません。」（9節）

そこでダビデはヨナタンに一つの提案をします。翌日は新月祭でした。新月祭とは、新しい月が始まる日に祝祭としていけにえをささげることが律法で定められていました。民数記28章11～15節に、新月祭のいけにえについての規定がありますが、この新月の祭の重要性は、通常よりも多くのいけにえを必要としていたことから分かります。それは家族で礼拝するための機会であり、すべての取引も中止されていました。ですからサウル王の娘婿であるダビデは、家族の一員として当然王とともに食事の席につかなければなりませんでした。しかし、ダビデは三日目の夕方まで、野に隠れさせてくださいと言います。サウル王がダビデのいないことをとがめたなら、氏族全体のための年ごとのいけにえをささげるために、ベツレヘムへ急いで行きたいと言ったと告げるよう頼みます。そして、このことに対するサウルの態度が判断の基準となるとダビデは考えていました。つまり、そのことについてとがめることをせず良しと言えば、ダビデは安全だけれども、もしそのことで激しく怒るなら、ダビデに害を加える、すなわちダビデの命を狙っているしるしだと言います。そして、ダビデは、ヨナタンに以前に結んだ契約のゆえに自分に真実を尽くしてくれるようにと頼みます。それに対して9節で「とんでもないことです」と、ダビデに咎があるなどということは絶対にないとヨナタンが強く否定します。しかし、父サウルが、ダビデに害を加えることが分かったなら、必ず知らせることで、ダビデとの契約を守り、彼に真実を尽くすことを約束しました。

私たちも、主イエスにある救いを通して、主にある家族の一員に加えられた一人一人です。私たちは、キリストの十字架の血の贖いにより深く結ばれた者たちです。ですから、私たちも教会の兄弟姉妹に対しては、どこまでも真実を尽くして、交わり、時には助け合い、時には支え合って信仰の歩みをともに歩んでまいりたいと思わされます。教会の中であって、ダビデとヨナタンのような美しい交わりが常に与えられることを願います。

2月9日（月）サムエル記第一20章10～13節

「主が父とともにおられたように、あなたとともにおられますように。」（13節）

5節でダビデが「でも、私を行かせて、三日目の夕方まで、野に隠れさせてください。」と言ったことを受けて、ヨナタンはダビデに野に出ましようと言って二人は野に出ました。人に話しを聞かれないように密談するためだったのかもしれませんが。

12節で、自分が語ることばの確かさを保証するために「イスラエルの神、主にかけて誓います。」と言います。ヨナタンが語る中身は、明日かあさつての今ごろまでに、父サウルがダビデに対して寛大かどうかを調べると言い、寛大でなければ人を遣わし、そのことをダビデの耳に入れるというものでした。もしサウルがダビデに害を加えようとしていることをダビデに知らせず、無事に逃げられなければ、「主がこのヨナタンを幾重にも罰せられますように。」と言います。そして、続けて「主が父とともにおられたように、あなたとともにおられますように。」

と言います。ヨナタンはダビデがこの後王になることを確信しながら、ダビデが王となった後は、主がともにおられ、ダビデ自身も主がともにおられるような王としての歩みをするようにと願っていたのではないかと思います。逆を言えば、サウルが主がともにおられないような政治を行ったことにより、主がサウルのもとを離れてしまい、すべてのわざわいは、その結果として来たということなのでしょう。

「主がともにおられますように」とのあいさつは、私たちはあまりしないかもしれません。しかし、主がともにおられるところに必ず祝福があることを思えば、主の豊かな祝福を祈ることばとも言えますし、それと同時に、主がともにおられるような信仰生活を送ってほしいとの願いとも受け取ることができます。今日も、教会のお一人お一人とともに主がともにおられますように、そして一人一人が主がともにいるような生活を送ることができますように。

2月10日(火) サムエル記第一20章14～17節

「しかし、あなたの恵みを私の家からとこしえに断たないでください。主がダビデの敵を地の面から一人残らず断たれるときにも。」(15節)

14節のヨナタンのことばは、自分ではなくダビデを次期の王として認めていることを意味しています。つまり、今後ダビデが王位に就く時には、サウルを倒さなければなりません。そしてサウルが倒される時は自分も一緒に死ぬ時であり、その時には、自分に主の恵みを施し、死ぬことがないようにする必要はないと言っているのがあって、ヨナタンは、どんなことがあってもダビデに王になってほしいと願っていたのです。それは主のみこころであれば、父サウルとともに自分も死ぬ覚悟ができていたとヨナタンはダビデに言ったのです。その一方で、15節では、もし主がダビデの敵を地の面から断たれるときにも、自分の家には恵みを施してほしい、つまり家を完全に断ってしまうようなことはしないでほしいと願っています。ダビデは後にこのヨナタンとの約束を忠実に守って、ヨナタンの子であるメフィボシエテを助けます。サムエル記第二4章4節にメフィボシエテのことが短く記されていますが、9章6～8節を見ますと、ダビデのところに来てひれ伏すメフィボシエテに、「恐れることはない。私は、あなたの父ヨナタンのゆえに、あなたに恵みを施そう。あなたの祖父サウルの地所をすべてあなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をするようになる」と言います。驚いたメフィボシエテは、「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださいとは。」と言います。メフィボシエテは知らなかったと思いますが、父ヨナタンとの約束を王となったダビデが決して忘れず、ヨナタンの真実な愛にダビデが報いた結果でした。私たちも、父なる神様から深い恵みを受けました。それは私たちが何かをしたからではありません。イエス様が十字架におかかりになって、私たちたちの罪を贖ってくださったので、この死んだ犬のようであった私たちを主は豊かに顧みてください、恵みを施してくださいました。主も、そのようにして恵みを忘れず、私たちを顧み続けてくださいます。

2月11日(水) サムエル記第一20章18～23節

「私とあなたが交わしたことばについては、主が私とあなたの中の永遠の証人です。」(23節)

ヨナタンは、父サウルのダビデに対する思いを確認するための具体的な計画を話します。まず新月祭にダビデが不在であることについて、サウルは事情を尋ねるでしょう。そのことについてヨナタンはそのあたりに三本の矢を放ちます。子どもを遣わして取りに行かせ、「それ、矢はおまえのこちら側にある。それを取って来い」と言うなら、ダビデは安全で何事もないのですが、もし「それ、矢はおまえの向こう側だ」と言うなら、行ってください、と言います。非常に分かりやすいけれども、ダビデとヨナタンにしか知りえない方法で、ダビデに身の安全を知らせようとした。

22節で、ヨナタンは「主があなたを去らせるのです。」と言いました。仮に自分のもとからダビデが去らなければならないという、自分にとっては望まない結末になったとしても、そこに主のみこころがあることをヨナタンは信じていたのでしょう。そして23節では「私とあなたが交わしたことばについては、主が私とあなたの中の永遠の証人です。」と言います。つまり、主の御前にあって、どんなことがあっても互いに真実を尽くすとの意味です。主にあって、私たちの人間関係においては常に主が証人です。夫婦、親子、教会の兄弟姉妹、すべての関係において主の御前に互いに真実を尽くすべきです。主を抜きに人間関係を築こうとするなら、感情、考えや思いなど、さまざまなものの行き違いによって健全な関係を築くことは難しくなることでしょう。私たちは、「主が私とあなたの中の証人です」と言えるような関係を常に築き、実際にそのような歩みをしているのでしょうか。私たちは、互いにダビデとヨナタンのような主にある美しい関係を保つことができているのでしょうか。

2月12日(木) サムエル記第一20章24～34節

「エッサイの子がこの地上に生きているかぎり、おまえも、おまえの王位も確立されないのだ。今、人を遣わして、あれを私のところに連れて来い。あれは死に値する。」(31節)

新月祭の食事が持たれました。25節に、食事の席の配置が記されています。サウルは、いつものように「壁寄りの席」に着きました。ここが王の席として指定されているのは、壁があって背後から襲われる心配のない最も安全な場所だからです。向かい側にはヨナタンが座り、いつでも父サウルを補佐できるようになっていました。両横は軍の長の席で、アブネルが一方の席に着きましたが、ダビデの席はあいていました。初日は、ダビデが思わぬことで身を汚したからだと思い、何も言いませんでしたが(26節)二日目もダビデの席が空いていました。さすがにサウルは、ヨナタンにダビデが昨日も今日も食事に来ない理由を尋ねます。(27節)ここでサウルはダビデを「エッサイの子」と呼びます。これは、明らかにダビデを軽んじ、軽蔑した呼び方です。ここからもサウルのダビデに対する思いを読み取ることができます。28、29節で、ヨナタンはダビデと打ち合わせたとおりに伝えます。しかし、このヨナタンの言葉は、サウルを怒らせるのに十分な理由がありました。本来であれば、ヨナタンにではなく、直接サウルに許しを願い出るべきでした。王である自分に一言の断りもなく、新月祭の食事に顔を見せな

いことは失礼極まりないと思われても仕方ありません。それで、30節では息子のヨナタンに怒りを燃やします。その怒りの原因は、エッサイの子、すなわちダビデがいるかぎりサウル王朝は確立されないということを言おうとしているのでしょうし、王朝の脅かしになるにもかかわらず、ヨナタンがダビデをかばっていることが理解できなかったのでしょうか。ヨナタンに対するサウルの怒りは、さらに燃え上がり、33節では槍をヨナタンに投げつけ、殺そうとまですたのです。そのことにより、ヨナタンは、父サウルがダビデを殺そうとしていることを確信しました。

31節で、サウルは「エッサイの子がこの地上に生きてるかぎり、おまえもおまえの王位も確立されないのだ」と言いますが、サウルは自分で王位を確立しようとし、それは、すなわちダビデを殺すということだったのでしょう。しかし、サウルは13章14節で「しかし、今や、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。主があなたに命じられたことを、あなたが守らなかったからだ。」また15章28節では「主は、今日、あなたからイスラエル王国を引き裂いて、これをあなたよりすぐれた隣人に与えられました。」とされています。つまり、二回もサウルは主から王国が立たないと言われていましたが、それでもサウルは悔い改めようとしませんでした。つまり、サウルが求められていたことは、自分の力で王国を堅固なものにしようとするのではなく、主の御前に謙遜に悔い改めることだったのでした。私たちは、いかがでしょうか。主の御前に悔い改めようとしなくて、なお自分の力で何とかしようとするのではないのでしょうか。主が私たちに求めているのは、心からの悔い改めではないのでしょうか。

2月13日(金) サムエル記第一20章35～42節

「早く。急げ。立ち止まってはいけない。」(38節)

ヨナタンは、ダビデと打ち合わせた時刻に野に出て、ダビデと打ち合わせたとおりに行いました。33節で「父がダビデを殺そうと決心しているのを知った」とありますように、ヨナタンはサウルがダビデを殺そうとしていることを確信しましたので、そのことをダビデに知らせるために、矢を放ち、「矢は、おまえより、もっと向こうではないか」と言います。つまり、主がダビデを去らせようとしているということです。その中であって、「早く、急げ。立ち止まってはいけない。」(38節)と言いますが、ダビデがサウルの手にかかって殺されてほしくないとのヨナタンの気持ちが伝わってくるようです。

41、42節では、ダビデとヨナタンの別れのあいさつがなされます。「三度礼をした」というのは、ダビデのヨナタンに対する尊敬の念を現しています。また「二人は口づけし」というのは、二人の間の友情を表しています。正当な理由もなく、サウルに命をねらわれることとなったダビデにとって、ヨナタンの友情は、どれほど大きな慰めとなり、励ましとなったことでしょう。私たちも、教会の中で良き交わりを常に持たせていただいておりますが、そのことも本当に幸いなことです。しかし、それとともに教会の兄弟姉妹たちが悩みの中にある時、窮地に陥った時、孤独を感じている時など、私たちの存在は、その方々の支えになるのでしょうか。願わくば、私たちの主にある交わりが、そして私たちの間にある主を通しての愛が、周りの兄弟姉妹

たちの励ましとなり、慰めとなり、力づけとなることを願います。しかし、私たちは自分の力でそのような存在になることはできません。主が私たちの交わりを豊かに祝福し、主が私たちの間にそのような愛を与えてくださることを切に願います。

2月14日（土）サムエル記第一21章1～6節

「祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、温かいパンと置き換えるために、その日主の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである。」（6節）

ヨナタンと別れた後、ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに来ました。ノブは、エルサレムの北でギブアの南に位置する場所であり、22章19節では「祭司の町」と呼ばれています。また、アヒメレクは、祭司であったエリのひ孫にあたります。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎え、「なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか」と尋ねます。恐らくダビデに何か悪いことが起こったのではないかと思ったのでしょう。

2節でダビデは、サウルに命をねらわれている現状をうまくごまかそうと考えたのでしょう。自分が一人でノブに来たのはサウルの特命のため、だれにも知らせはならず、若い者たち、つまり供の兵たちとはしかじかの場所で落ち合うと言います。ここでのダビデのふるまいについては弁護する意見も確かにあります。しかし、22章11～19節を見ますと、サウルが祭司たちを殺すように命じ、18、19節ではドエグが祭司八十五人と男も女も、幼子も乳飲み子も剣の刃で討ったとありますが、ダビデのごまかしが思わぬわざわざいをノブの祭司たちに招いたことは間違いありません。事情がどうあっても、その場をうまくごまかして乗り切ろうとすることは決してキリスト者がすべきでないことをみことばを通して教えられます。

3節で、ダビデはアヒメレクに「パン五つでも、ある物をください。」と食べ物を求めます。野で三日間過ごす間、ダビデは何も食べていなかったのも非常に空腹だったのでしょう。祭司アヒメレクは、手もとには普通のパンはなく、聖別されたパンはありますと答えます。このパンは、レビ記24章5～9節を見ますと、聖所に並べられていたパンで、アロンとその子たちが、聖なるところで食べると定められていました。祭司ではないダビデは、この聖別されたパンを食べる資格はありませんでした。しかし、性交していないことを確認した上で、祭司はダビデに聖別されたパンを与えたのです。このことはマタイの福音書12章1～8節やルカの福音書6章1～5節で、イエス様が安息日律法について教えられる時に引用されています。ここでイエス様は人の必要に答えることは安息日の律法にまさることを教えようとされました。私たちも、みことばに従うことは大切です。教会のさまざまな規則に従うことも必要なことであり、大事なことです。それを否定するものでは決してありません。しかし、神の愛、恵み、あわれみは、すべてにまさることをイエス様はここで教えておられます。そのことがパリサイ人のように自らを義とすることで人をさばくことになってしまったり、人を交わりから排除することになっては本末転倒になりかねないことを思わされます。